FAO 林業職員体験記（1）

笠　井　秀　則

昭和61年の春，熊本営林局内之浦営林署に勤務していたところ，突然，林野庁の海外林業協力室からの電話で FAO の地域林業プロジェクトに専門家として参加しないかという誘いを受けた。当該プロジェクトは我が国の農林水産省が FAO に予算を拠出して，その実行管理を FAO が行っているものでトラストファンドプロジェクト（TFP）と呼ばれるものの一つであり，近年地球的規模で問題化している熱帯林の経営に係る諸問題を取り扱い，通算5年をかけて第一段階を東南アジアで，第二段階を南米で実施することとなっていた。第一段階は既にスウェーデン人のコーディネーターと林野庁から派遣中の日本人専門家の計2名によりタイ国のバンコクを拠点に活動が行われて約3年が過ぎていた。第二段階への移行期を迎え，林野庁から交替の専門家を派遣することとなったため，私に誘いがかかったのであった。FAO には以前2年間準専門家（アソシエート・エキスパート）として林業局本部に勤務したことがあり，勝手を知っていたし，南米勤務という興味もあり，結局派遣を引き受けることとした。

さて，その年の8月に営林署から林野庁本庁へ転勤となり，本格的に FAO 勤務の準備が始まった。まずは専門家としての雇用手続き上の個別面接のため FAO 本部のあるローマへ出向かねばならなかった。その後，業務引き継ぎのためバンコクへ3か月出張せねばならないとのことであった。南米への赴任は年が明けての2月頃が予定されていたが，プロジェクト事務所の所在地は未定であった。

面接のための出張は9月中旬の一週間となり，南回りのアリタリア便を予約した。ところが出発当日の成田でのチェックイン間際になりキャンセルされたため，急遽，予定日通りにローマに着く便を捜し JAL 北極回り便に何とか座席を確保でき，空港から FAO 宛に到着便の変更を連絡して機中の人となった。道中何事も無くローマのフェミチーノ空港に到着し，林野庁から派遣中の勝久氏の出迎えで市内へと向った。

林業局の事務所は，FAO 本部本館のあるカラカラ浴場通りよりも空港によったクリストファー・コロンボ通りの F 別館にある。以前は大理石造りの本館の5階に入居していて，何かと居心地が良かったものである。さて，プロジェクト第一段階を管理している事業部のアジア大洋州デスクの担当者達と意見交換を行った後，事業部長のムトー氏の面接を受けた。30分間程度であったが，FAO の熱帯林行動計画（TFAP）

KASAI, Hidenori : A Life as an FAO Forestry Expert

林野庁林産課

とこれから勤務するプロジェクトについての個人的意見を求められたので，南米の発展途上国の林業・林産業の振興にとって有意義であり，私的にも南米在住は初めてでもあるため非常に興味があると答えた。プロジェクト事務所の所在地としては，ラテンアメリカ地域事務所のあるチリ国サンティアゴ市に置くのが機能的であろうと提言した。中南米勤務に必要なスペイン語については目下簡単なことしか喋れないと答えると，今後の潜在力に期待するということで了となった。これをもってその年の10月から3か月間のコンサルタント契約と翌年から2年間の専門家雇用契約を交わすこととなった。

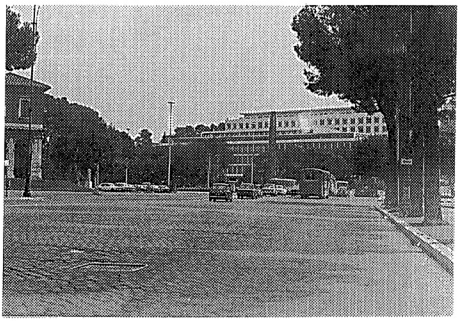

写真-1　FAO 本部本館（旧イタリア植民地省）

写真-2　アッピア街道（旧道）

ローマのFAO本部には昭和52年4月から2年間林業局準専門家として勤めたため知人が何名かおり，彼等とも暫くぶりで再会することが出来た。また新しい人達とも知りあうことが出来た。僅か一週間たらずの滞在であったが，7年ぶりのローマは以前とあまり変わっていなかった。ただ，郊外に高層アパートが増えたこと，市内を走る車が傷の無い新車が多くなったこと，大理石建造物の色の汚れが進んだことが印象として残った。もちろん懐かしの本場イタリア料理とビーノにも舌鼓をうった。帰路は予約どおり南回りのアリタリア便で機内食のフルコースはまあまあの味と量であった。

3か月間官舎を留守にするため，部屋の整理や車を郷里へ預けるなどの身辺整理とコンサルタント契約手続を終えてバンコクへ旅立ったのは9月下旬の夕刻だった。バンコクには同日夜半に到着し島田泰助氏の出迎えでホテルへと納まった。ホテルは林業プロジェクトが入居しているFAOアジア大洋州地域事務所に近く，徒歩で10分程の距離で通勤には便利であった。毎日，小学校の朝礼風景を眺めながら出かけ，帰りは寺の境内をぬけてきたが，暑さの中で境内にたむろしている牛の群の臭いには閉口した。ホテルの近辺はスーパーなどの商店，飲食店，屋台がひしめき合い活気があり，日常生活用の買物にも便利な場所だった。

FAO地域事務所はチャオ・プラヤの畔にあり鉄筋コンクリート造りの新館と木造の旧館から成り，我々の林業プロジェクトは旧館の2階の一角を占有していた。かっ

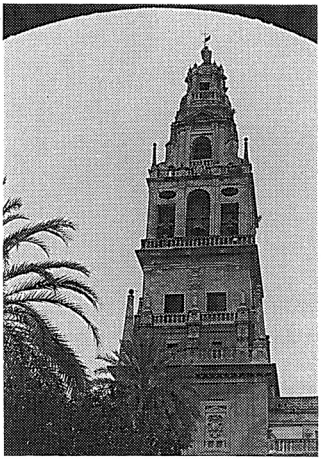

写真-3　ヒラルダ

て地域事務所の林業担当官が使用していた場所で，私のアソシエート・エキスパート時代に出張で訪れたことのある場所だった。建物が河畔の地盤沈下で川の方に少し傾いており，慣れないと自分の平衡感覚が狂っている様な錯覚に囚われたものだった。職員はコーディネーターであるスウェーデン人のボシュトロム氏，林業経済専門家として島田氏，現地タイ人の秘書と運転手の計4名だった。島田氏は近日中に契約期間を終えて帰国するため，以後の業務を私が引き継ぐこととなり，年明けに予定されている南米での第二段階への移行準備として既存資料の整理や今後の業務内容，業務分担などについて検討を始めた。ところが10月中旬からボシュトロム氏が中南米地域のFAO林業会議に出かけることとなり，彼の留守中，私は資料収集を兼ねたスペイン語研修のため又もローマを訪れることとなったのである。

今度は1か月の滞在で，研修はカラカラ浴場通りのFAO本部本館で行われるため，徒歩で15分程の所にあるペンシオーネの一部屋を確保した。御存知のとおり中南米での生活では英語はあまり役には立たない。外人観光客等が多数訪れる場所は別として，ほとんどの国での日常用語にはスペイン語が要求される。7年前に観光でスペインを訪れた際は旅行者会話本と英語で何とか凌いだが，長期滞在勤務となると本格的に習わなければならない。この際，付け焼き刃ながら教師について指導を受けることとなった。午前と午後の2課程の基礎レベルをそれぞれアルゼンチン人とスペイン人から教わった。練習不足の点は現地へ赴任してからの実地研修に頼るしかない，イタリア語の時も何とかなったではないかと腹を決めた。個人教授であったおかげで少しは上達することが出来た。

滞在中の用足しのための足として車を借りた。それはFAO人事部の中田氏所有のサードカーで，私が以前ローマでの任期を終えて去る際に彼の結婚祝に譲った車で既に10年以上走っていたが，まだ大丈夫であった。赤いオースチン・ミニクーパー1000でローマ市内の狭い裏道を走り回るのと駐車するにはとても重宝な存在だった。この度も食事に出かけたり，知人宅を訪ねたり，休日のドライブなどに利用した。お陰で退屈せずに済んだ。余談ながら，イタリアではタクシーの流しは無く特定の溜り場に待機しているので，そこまで出向くか電話で呼びつけるかせねばならない。しかも夜間はなかなか待機していない。また，ある程度の酒気帯び運転は大目に見られているので，つい便利な車をかってビーノを傾けながらの夕食へとレストランテへ繰り出すこととなるのである。

バンコクへ戻ってから12月末に帰国するまでの生活は，勤務時間が終わるとホテルに帰り冷房のきいたレストランでシンガービールを1本。蒸暑い気候のための水分

とカロリーの補給で，レストランの窓から表の通りの様子を眺めつつコップを傾けるしばしの休息。それから部屋へ戻って着替えて外へ出る。タクシーをつかまえ，秘書に教えてもらったタイ語で行先を告げ値段交渉成立して乗り込む。行先はアイス・スケートリンクである。というのは，たまたま部屋でテレビを観ていたらリンクの広告が目にとまった。そこでフロントで場所をきき早速出かけた。タイ人には馴染みのないスポーツなのでタクシー運転手も不案内であり，かなり捜しまわって辿り着いた。料金を払い場内に入ると熱帯国にしては立派な 60 m×30 m のホッケー・リンクで氷質もまずまずである。日本から自前のホッケーブーツを持参していなかったが，幸い場内に小さなスケート用品店が開業していたのでブーツを買い求めブレードを研いでもらってから初滑りした。以来，頻繁に足を運んだ。毎日営業しており夜 9 時までなので，景さ凌ぎと運動不足の解消にはもってこいだった。

写真-4　オースチン・ミニクーパー 1000

またバンコクでは 36 回目の誕生日も迎えた。丁度前日が秘書の誕生日で，プロジェクトでは彼女のためにささやかなパーティーを持ったところだった。そこで私も誕生日の当日，運転手を案内兼通訳として連れて街へ出かけ数軒の店を回った後，適当なバースディケーキを買い求めて帰り，プロジェクトの皆に振る舞い簡単なティー・パーティーを持った。

バンコク出張から帰国し年末年始を過ごし南米への赴任の心づもりを進めた。この間プロジェクト事務所の所在地について色々検討されたが，結局ペルー国リマ市におちつくことになった。リマには FAO 国別事務所があり，この事務所が我々のプロジェクトの受入れ協定調印に当たることとなった。調印され次第赴任する手筈であったが，よくあるとおりペルー側の内部決裁に手間取り，当初予定の 2 月はとうに過ぎても何時調印されるのかわからぬ状況だった。この間にボシュトロム氏はバンコクの他の林業プロジェクトに居残り，新しくペルー人のモレー氏がコーディネーターとなることが決まった。散々待たされてペルーへの赴任が可能となったのは 6 月のことだった。出発日を 6 月 28 日に決め FAO に通知し，契約手続きと引越し準備を進めた。海外引越し家財道具は航空便で 500 kg まで FAO が負担し 1 kg につき 10 $ の保険をかけてくれるので，出発の一週間前に FAO 指定業者に書類と荷物を渡して輸出手続を取ってもらった。任地で使えないものは自費で郷里へ送って保管してもらった。車も売却し，出発の 3 日前に官舎を引き払いホテルへ移った。留守にする間の住民手続き，銀行口座等の手続きも済ませ，派遣の辞令を受け取って準備完了。

赴任にはバリグ・ブラジル航空便を利用した。この便はリマまで直行するので引越

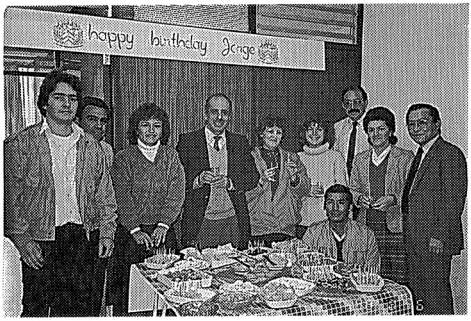

写真-5 プロジェクトの仲間たちとコーディネーターの誕生日に

し荷物の携行が楽なためである。6月28日昼過ぎ成田を発ち，空路20時間余の長旅の後，同日の深夜リマのホルヘ・チャベス空港に到着した。日本との時差は14時間半。空港には国際協力事業団（JICA）のアマゾン林業実証プロジェクトの小池秀夫リーダーが出迎えて下さった。私の勤めることとなるFAO林業プロジェクトのコーディネーターであるモレー氏も出迎えて下さっていた。携行荷物も無事に引き取り，税関もすんなり通過して夜間外出禁止令の出ている市内へと向かった。宿は小池氏の計らいで日系人経営のペンシオーンの部屋が確保されていた。この山本ペンシオーンには在リマ日本大使館に単身赴任中の小島領事も入居されており，何かと都合が良かった。以後10日間ほどここにお世話になった。季節は冬で，リマは連日どんよりと曇り，沖の寒流から海霧が街に流れ込み湿度がかなり高く嫌な気候だった。冬の平均で気温10数度，相対湿度80～90%という具合である。位置的には南緯12度，標高50 m。太陽は東から昇り，北を通って西に沈む。当たり前のことだが，北半球でしか暮したことのない者にとっては慣れるまでは変な感じがした。到着翌日はペルーの祝日で事務所は休みのため，時差ぼけの調整と長旅の疲れを癒やすのに費した。

勤務第一日目は挨拶回り，モレー氏と共にFAO国別事務所へ出向き所長のバネガス氏をはじめとする職員達に紹介された。またここで身分証明書等の必要書類発行の手続きも行った。次いで，我々の事務所が入居することとなるペルー国林野庁へ出向き，長官のロメロ氏や次長のオヘダ氏に紹介された。林野庁は民間の雑居ビルに入居しており，一階に銀行の支店とペルー料理店，2階が貸駐車場，3階から14階に農業省関係と民間企業，最上15階は中華（チーファ）料理店となっており，この中華料理店は我々プロジェクトも時々利用した。

定住の第一歩は住宅捜しから始まる。毎朝新聞の広告欄に目を通し，手頃な物件に電話をかけ予約して現物を見に出かけた。電気や水道，ガスの安定供給状況，電話，駐車場，門番の有無など諸々の点を確認するとともに家主との契約条件の交渉。ああ，早く落ち着く場所を見付けたい。（未完）